

ウイスキーボトルと本と私



zyzu331

十七の頃から本を読み始めて今日までどれくらいの本を読んだか？

どうも見当もつかない。こういう場合、なにか単純なものを手がかりに、あとは機械的に計算するのもひとつの手かもしれない。それには私の場合、ウイスキーのボトルがよさそうだ。

私はほぼ週に1本、多い時は2本のウイスキーを空ける。私が読む本の冊数も似たようなものではないか。まあ、そういうことにしよう。それで、まずウイスキーボトルから計算すると、週に確実に空けるウイスキーボトルは1本。1年の週数をまあ52として、年に52本。これに、たとえば15年をかけてみると、15年間で私が飲むウイスキーは780本。飲み過ぎなような、そうでもないような。

では、私が読んだ本の数は？ 十七の頃から読み始め、それから37年の歳月をむだにしたわけだから、1年52冊に37をかけて、ええと、電卓をパチパチ……。1924冊。これもまた、多いような、少ないような。しかしそれよりも驚くのは、その1924冊の中身、その大半を忘れてのことである。残っているのは二日酔いの朝の切れぎれの記憶のようなもの。もはや脈絡も経緯もたどることができない。

しかしはるか昔、一番最初に私にグラスを差し出し、私に飲酒癖をもたらしたバーテンダーと同じ役回りを演じた本が、私にはあるのだ。あのバーテンダーの顔を忘れないように、私はその本を忘れないだろう。それは、遠藤周作「ぐうたら交友録」である。

この本は、遠藤さんが友人の文士たちをからかうために書いたようなエッセイで、その友人というのは、北杜夫、安岡章太郎、阿川弘之、吉行淳之介等々。遠藤さんの文学的業績の前では吹けばとぶようなエッセイだが、私は読んで唖然とした。エッセイの中で北さんはキュウリを三本持ってポーッと立っているし、安岡さんは知ったかぶりを大工に笑われ、阿川さんは目を血走らせてマツタケを食い、吉行さんは娼婦に塩をまかれて階段を転げ落ちている。

それまで私は、小説本を読んだりするのは、マジメで成績がよく頭のいい人間がすることで、そのいずれでもない自分は本を読むタイプの人間ではないと思っていた。また、作家たちも読者同様だろうと考えていたのである。それがどうだろう。皆々、ヘンで、間が抜けており、私が漠然と考えていた人種とは違う。

私は、これなら自分も本を読んでいいのではないかと思い、手始めに中公文庫で出ていた北杜夫「どくとるマンボウ青春記」を買って、読んでみた。それはとても面白く、私は繰り返し読んで、本は手垢で真っ黒になった。そして、北さんが好きだったトーマス・マンの名を知り、そのほかあれこれの作家の名前を知って、その作家の本を手にするようになった。他の諸氏の場合も同じことが繰り返された。

私の読書はこうして始まり、それが概算1924冊になったわけである。もちろん、さきに書

いたように、何を讀んだかいまはその大半を忘れていたのだが、しかし、それらの本は、少なくともウイスキーよりはずっと多く今日の私を形成する力になったろうと思う。ということは、その発端を作った「ぐうたら交友録」は、私に最も影響を与えた一冊と断言していいのではないか。それなのに私は、本を讀み始めてしばらく経った頃、この本を古本屋に売ってしまった。本棚に「ぐうたら」なんてタイトルの本があるのが恥ずかしくなったからである。この恩知らずめ。

私が讀んだ1924冊の本にその名がないプルーストは、「讀んだ本にはそれを讀んだ時の月の光が織り込まれている」なんてキザなことを言ったそうである。私にはとても理解できない。これまで讀んだどんな本にも私はそんなものを見出したことがない。では、たとえば古本屋で「ぐうたら交友録」を見つけ、頁を開いたら？ もちろん、私はいかなる頁にも月の光なんか見つけはしないだろう。ただ、私はずっと知るだろう。この本こそ私に最も影響を与えた本なのだということを。そして今夜、いつものようにウイスキーボトルを手にしながら、私は本の表紙にあった「狐狸庵山人」の横顔を思い浮かべ、深甚たる感謝の念を捧げるのである。